提　　言

2020 年以降のレガシーに向けて

～祝祭都市の未来をデザインする～

写真は 2002 年 FIFA ワールドカップ開催時の大分市内

平成３０年５月

大分経済同友会

１．大分経済同友会のこれまでの活動と今後の展開

（１）創造都市を軸とした大分経済同友会の提言活動

大分経済同友会（以下、同友会）は、2008 年より、大分都心南北軸整備を契機とした県都大分のまちづくりのあり方について調査研究を行い、市民や行政を交えたシンポジウムを 2 度にわたり開催した。その成果を踏まえて、公共交通や歩行者を重視し、中心市街地の回遊性を高める交通まちづくりのあり方を、2010 年 8 月に大分市などに提言した。

同時に、まちなかににぎわいを取り戻すにはハード整備に加えソフト面での取り組みも必要と考え、「創造都市（Creative City）」という文化の力を活かした都市再生・産業振興策に着目して調査を進め、2011～12 年にかけて大分県立美術館（OPAM）整備の方向性に関する提言に活かしてきた。

2014～15 年の提言では、創造都市の取り組みが大分市や別府市だけでなく、県内各地に広がりを見せていることを踏まえ、県全域を創造都市の考え方を用いて活性化する「創造県おおいた」を県などに提唱した。さらに、その取り組みを地方創生につなげることを重視し、2018 年に国民文化祭／全国障害者芸術・文化祭（国文祭）を誘致して、2019 年のラグビーワールドカップ（RWC）、2020 年の東京オリンピック・パラリンピック（東京オリパラ）に向けて切れ目なく文化プログラムを推進することを求めたところである。

さらに、こうした文化プログラムの連続展開にともない、大分に国内外から注目が集まる 2018～20 年にかけ、創造都市の裾野を広げるうえで、クリエイティブ産業の一分野である食文化（ガストロノミー）のブランド力を高めることを、2017 年に大分市へ提言した。

創造都市と交通まちづくりに関するこれまでの同友会提言

時　期	提出先	提　言
2010 年 8 月	大分県・大分市など	県都大分の交通体系について
2011 年 1 月	大分県	県立美術館整備の方向性～クリエイティブな美術館&都市づくりに向けて～
2011 年 9 月	大分県	県立美術館整備の方向性Ⅱ～創造都市実現のための処方箋～
2012 年 8 月	大分市	大分都心南北軸整備の方向性について～アートと交通のまちづくりに向けて～
2014 年 4 月	大分県・大分市	クリエイティブ大分を目指して～長期ヴィジョンと 2015 年に向けた戦略の必要性～
2015 年 7 月	大分県・大分市・別府市	芸術文化の創造性を活かした地方創生大分モデルの提言
2017 年 2 月	大分市	食文化とアートを活かした市民と産業の成長戦略～未来創造都市の実現に向けて～

こうした同友会の提言も踏まえ、都心南北軸整備が進捗するとともに、2015 年には OPAM や JR おおいたシティが、まちなかに開かれた文化・集客施設として開業した。大分県が 2015 年に策定した長期総合計画「安心・活力・発展プラン 2015」でも「創造県おおいたの推進」が政策の柱に謳われた。こうした方針のもとで誘致した国文祭を機に、県は各地でカルチャーツーリズム（文化観光）の推進を図り、これを RWC、東京オリパラの文化プログラムにつなげることでレガシー（未来へ残す財産）にしようとしている。

大分市も、2017 年策定の総合計画「おおいた創造ビジョン 2024」で「未来創造都市」を将来の都市像に掲げた。市は食文化のブランド化についても、新たな食のブラ

ンドとして「豊後料理」を開発し、大分の食の高付加価値化を図る事業を開始した。

（２）2019 年までの課題と 2020 年以降のビジョンを見据える

大分県は RWC 開催を通じて、①ラグビーの魅力と感動を世界のラグビーファンと身近で分かち合うこと、②品位・情熱・結束・規律・尊重というグローバルなラグビー精神を体験してもらうこと、③これまでのアジアからの誘客に加えて欧米や大洋州からの多くの観戦客で海外誘客のウィングを広げることを狙っている。[1]

こうした方針のもと、大分では現在、RWC に向けた競技大会の開催準備が進展している。しかし、会場整備や交通対策が急ピッチで進む一方で、市民の盛り上がりが 2002 年 FIFA ワールドカップに比べて静かすぎると懸念が寄せられている。観光振興の面でも、観戦に訪れるインバウンド客の取り込みに出遅れるなど、大分を世界に売り出す千載一遇の好機を十分に活かせるか否かが危惧されている。2019 年に向けて、県都大分を「祝祭都市」として盛り上げていく工夫が求められよう。

そのとき、2019 年を期限とした短期計画だけでなく、2020 年の東京オリパラ、さらには 2021 年以降にどのようなレガシーを残すかという長期ビジョンをあわせて構想することがきわめて重要である。RWC や東京オリパラというチャンスを、地域経済の活性化につなげる戦略的取り組みが官民ともに求められている。それは大分に限った話ではない。国全体としても、東京オリパラまでは文化プログラムの重点実施という計画があるが、その後のビジョンは明確には描けていない。地方創生も 2020 年が目標年次となっている。国としての新たな方向性が見えない中、大分から今後の地域づくりのモデルを提示していくことが重要だ。同友会が 2010 年当時に提言した県都大分の都市インフラが完成しつつある今日、それらをどう利活用して、より魅力的な創造都市を目指していくかという都市デザインの視点が重要だ。すなわち「祝祭都市」の未来をいかに構想するかが問われている。

以上のような問題意識を踏まえて、同友会は今般、次の提言を行うこととした。

２．2020 年以降のレガシーに向けた提言

提言１　2019 年のアートフェスティバルを世界に通じるものに
＝ 創造都市（Creative City）の深化

まず重要なことは、ここまで進んできた創造都市の取り組みをさらに深化・発展させることである。大分市は、2019 年の RWC にあわせて市内でアートフェスティバルを開催し、国内外から訪れる観客を文化芸術で迎えることを計画している。このフェスティバルを、世界に通じる発信力の強い事業に仕立て上げることが不可欠である。

また、国は東京オリパラまでの期間を文化プログラムの重点実施期間と位置づけているが、特に 2020 年 4 月以降に全国各地で「東京 2020 Nippon フェスティバル」を展開し、オールジャパンでの祝祭感の盛り上げを企図している。大分市として、2019 年のアートフェスティバルの経験・蓄積を活かしてこの祭典に参画することを提言する。

---

[1] 大分県議会平成 29 年第 4 回定例会における 12 月 4 日付知事発言に拠る。

こうした積み重ねを通じて 2021 年以降、アジアに加え欧米や大洋州も含めて広く世界から集客できる体制を確立すべきである。そのためには、情報通信技術（ICT）を活用したインバウンド促進のための基盤をこの機に整備することも重要である。[2]

あわせて、大分市は 2018 年度よりクリエイティブ産業の育成に着手すると聞くが、この分野で先行する県のクリエイティブ産業創出事業とも連携と役割分担を図り大分市らしいクリエイティブ産業育成に取り組んでほしい。そのとき重視すべき分野がポテンシャルの高い食文化であろう。「豊後料理」の高度化・発信を 2019 年度以降も継続・拡大していくことを提言する。

提言２　ラグビーワールドカップにあわせて市民が主役の祭を開催
＝ 共生都市（Collective City）の推進

RWC や東京オリパラをスプリングボードとした大分の文化の世界発信と同時に、大分市民が主役となってまちなかを盛り上げる祭も必要である。FIFA ワールドカップサッカーの大分開催が成功した鍵は、大分城址公園と中心商店街で市民主体のお祭りを開催し、それを市民が大いに楽しむとともに来訪者も楽しんだことにある。一帯を青とオレンジのおもてなしカラーで飾りつける「おおいたカラープロジェクト」を展開し、お祭りエリアを形成できたことが大きかった。

2019 年の RWC でも、こうした市民の祭を開催して地域全体を盛り上げ、国内外から訪れる観客を迎えることを提言する。彼らと一緒になって RWC を楽しみ、感動を共有したことが成功体験となって、市民が真にグローバルな人材へと成長していくことを期待する。

アートフェスティバルと市民主体の祭典の二本柱があることで、地域外に発信する大分のブランド力の向上と、市民のシビックプライド（都市に対する愛着･誇り）の醸成が図られ、両者が好循環を描いていくことが期待される。

提言３　大分市中心部の広場を有機的に活用
＝ 庭園都市（Garden City）の活用

提言 1・2 で示した祝祭の主な舞台となるのが、大分市中心部に整備が進みつつある多彩な広場空間である。

市中心部ではここ数年でさまざまな交通基盤整備[3]や施設整備[4]が進展したが、こうした取り組みと並行して、複数の広場空間の整備が進みつつあることに注目したい。すでに完成した広場として大分いこいの道や府内中央口広場があり、現在進行形で、大友氏遺跡歴史公園、鉄道残存敷、祝祭広場、大分城址公園の整備が進んでいく。これだけの規模の豊かな広場空間が都心部に集積する都市は稀有であり、これらの空間は 21 世紀の大分を象徴する貴重な社会資本に育つに違いない。

さらに大分は「夜景」という新たな個性を獲得しつつある。以前より、別府の夜景

---

[2] インバウンド客向けのお役立ち情報を多言語で発信するアプリの開発・普及、大分の情報をメールや SNS で知らせ続けることでリピーター確保につなげる仕組みの導入、キャッシュレス決済や Wi-Fi 環境の整備など。

[3] 大分駅付近連続立体交差事業、宗麟大橋（庄の原佐野線大分川架橋）、リボーン 197（国道 197 号再整備）等

[4] J:COM ホルトホール大分、OPAM、JR おおいたシティ等

や新産都の夜景があり、例えば水族館「うみたまご」からは両方の景色を楽しめる。アートを活かしたまちづくり（おおいたトイレンナーレ、地下道アート）で生まれたパブリックアート群も、イルミネーションやライトアップを通じて夜間にその魅力を発揮する。大分城址公園の「府内城仮想天守イルミネーション」や、JR おおいたシティを中心とした冬季イルミネーションも好評である。観光客が、夕食を楽しむのとあわせて、こうした夜のスポットを巡ることで、市内への滞在時間が延びて宿泊客数の増加に寄与することが期待される。

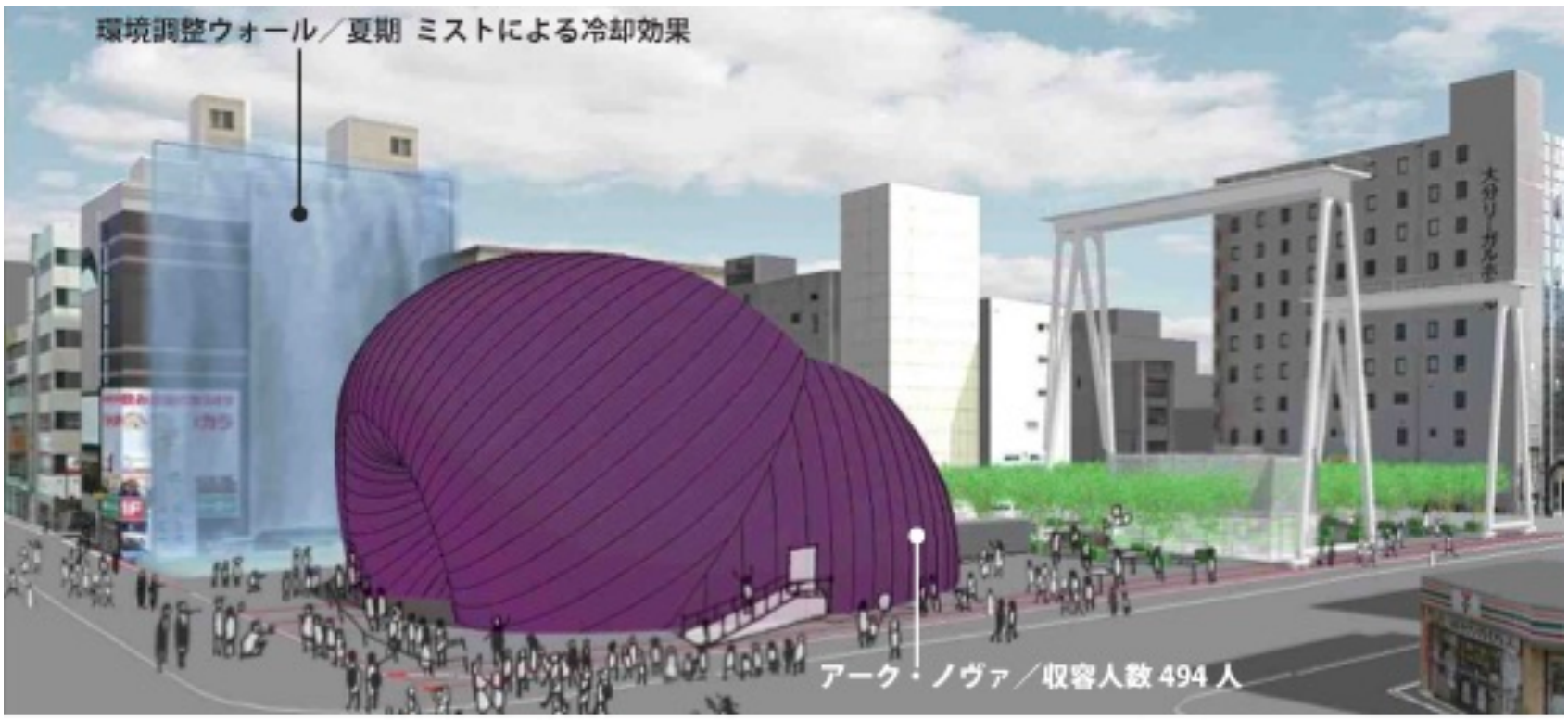
このため、アートフェスティバルや市民の祭の会場として、市内中心部の広場空間や、かんたん港園から高崎山にかけてのウォーターフロント・エリアを活用し、特に夜間を中心に楽しめるお祭りイベントを開催することを提言したい。

平成 30 年 5 月

大分経済同友会

代表幹事　**姫　野　昌　治**

代表幹事　**池　辺　克　城**



大分市中心市街地祝祭広場整備事業　第二次選考技術提案書より

大分駅前広場のイルミネーション

大分城址公園仮想天守イルミネーション

2002年FIFAワールドカップ開催時の城址公園　大分市主催KONNICHIWA! FESTAの様子

2002 年 FIFA ワールドカップ開催時の大分市まちなかの様子

大分経済同友会が提唱したカラープロジェクト

大分現代美術展 2002 アート循環系サイトが開催された（写真は大友館跡）

2002 年 FIFA ワールドカップ開催時　会場周辺の様子